

しゅんらい／春に鳴る雷のこと。寒冷前線通過時に発生する界雷で、ひょうを伴うこともある。春の到来を伝えるともいわれ、冬眠していた地中の虫たちが雷鳴に驚いて目覚めるという意味から「虫出しの雷」とも呼ばれる。

らしく

自分らしく、
粋なくらし

CLOSE UP

一人ひとりに 寄り添う 国際支援



CLOSE UP 02
特定非営利活動法人IYEO青少年異文化交流推進協会
外国人留学生、日本人留学生のサポートで
若者の可能性を広げる



CLOSE UP 01
赤道ギニアを支援する会
共感の輪を広げ続けて20年以上
小さな積み重ねが大きな支援となる



CLOSE UP 03
特定非営利活動法人国際人材支援センター
日本で働く外国人労働者の
就労・生活面を支える



共感の輪を広げ続けて20年以上 小さな積み重ねが大きな支援となる

赤道ギニア共和国を訪れた時の様子（平成27年）

CLOSE
UP

一人ひとりに寄り添う国際支援

今、世界には解決すべき課題が多くあります。人材育成や就労・物資の支援など、地域の力で一人ひとりに寄り添った国際支援を行っている団体を紹介します。

赤道ギニアを支援する会

遠く離れた国と国を結ぶ主婦たちの熱い想い

広島市内の主婦たちのグループが、アフリカ中央にある赤道ギニア共和国の恵まれない子どもたちに、文具や服を贈る目的で「赤道ギニアを支援する会」は平成10年に発足しました。

代表を務める山藤寿美子さんが平成8年に知人の誘いで同国を訪問。牛舎のように簡素な造りの小学校で、教師が野菜を作って売ったお金で教材を購入するなど、厳しい環境でありながら、生き生きと学ぶ子どもの様子に引かれて何か力になりたい、と思ったのがきっかけです。



▲ 代表の山藤寿美子さん

当初は、当時山藤さんが住んでいた呉市内で定期的にバザーを開き、その売上で現地へ贈るための文具を購入、寄付してもらった服と一緒に送るようになったそうです。

「自分の子育てでも落ち着き、何かしたい

と漠然と思っていた時に赤道ギニア共和国を訪れて、そこで現地の人の大らかさにカルチャーショックを受けたんですね。それまで自分の生活の中で当たり前だったことが当たり前ではないと感じたり。この人たちのために、何かをしたいと考えようになったんです」と山藤さん。その後、山藤さんは広島市内に引っ越しした後も活動は継続し、20年以上たった現在は、会員は約80人、里子支



▲ 南区民文化センターさざなみギャラリーでの写真展（令和2年10月）



▲ 西区民文化センターでのフリーマーケット（令和元年6月）

援の里親さんや支援者まで含めると100人以上が携わっています。

言葉の壁を越えて生まれる信頼 支援は小学校建設にまで広がる

発足後、毎年約30箱贈っている荷物は、市民から寄せられた文具や服を1箱約10kgの段ボールに詰め、船便で送っています。段ボール1箱あたり約7千円の輸送代がかかり、期間は4カ月もかかります。山藤さんたちはその輸送代を賄うために、毎月1回市民から寄せられた食器や日用品を西区内で開くフリーマーケットで販売。さらに、現地の様子を紹介した写真展を西区、南区、呉市で開催し、多くの人に知ってもらうよう活動しています。令和2年春からは、新型コロナウイルス感染症拡大の影響でフリーマーケットを開けない状態が続いていますが、西区内の拠点となる事務所に届けられた文具や服などを仕分けして送っています。

「始めた当初は、公用語のスペイン語も分からず苦勞したけど、通訳やメールを手伝ってくれる支援者も増えて助かっています」。山藤さんは、現在まで同国を12回訪れており、現地の人たちとの交流を深めています。現在は3年前に亡くなったメンバーが寄付したお金で「ケイコ・モリモト小学校」の建設も始まっています。彼女は山藤さんと何度も同国を訪れて熱心に支援していたひとりでした。

「現地の人とは言葉が伝わらなくても、会うと表情や身振り手振りで伝わることもあり信頼も生まれます。交流を積み重ねる中で生まれた心と心の繋がりをこれからも大切にして、また落ち着いたら現地を訪れて交流を深め、小学校をこの目で確認したいですね」と山藤さん。広島から何千キロも離れた国と紡いだ絆を大切に、コロナ禍の困難にも負けずに活動を続ける皆さんに、大きな力を感じました。



▲ 現地に送る荷物を準備中

自分らしく、
暮らす

Vol.59
春雷号
2021.3

contents

特集

01 一人ひとりに寄り添う国際支援

▶ 赤道ギニアを支援する会



赤道ギニア共和国を訪れた時の様子（令和元年2月）

▶ 特定非営利活動法人IYEO青少年異文化交流推進協会



アメリカの大学の
クラブの様子

▶ 特定非営利活動法人国際人材支援センター



カンボジアの
支援団体と現地
交流した様子

05 らしっくレポート ひろ記者が行く

▶ 僕らの冒険が世界を変える！～「ぞうさんペーパー」から始まるスリランカとのパートナーシップ～

らしっくコラム

▶ 広島経済大学興動館「広島ハワイ文化交流プロジェクト」
広島経済大学
田中 泉 教授

06 ようこそ！公民館へ

▶ 中区内公民館

07 人材バンク 名人 宝人 達人

▶ 公益財団法人日本スポーツ協会
公認スポーツリーダー・ジュニアスポーツ指導員
松山 多美さん
▶ ケーキ作りの指導
築地 靖隆さん

09 Hm助成支援団体のご紹介

▶ 一般社団法人Hello Hiroshima
▶ 一般社団法人舞台芸術制作室無色透明
▶ 性暴力・DV・虐待サバイバーを支援するコミュニティひろしま シムト

11 情報の森

15 プラザ通信

外国人留学生、日本人留学生のサポートで若者の可能性を広げる

特定非営利活動法人IYEO青少年異文化交流推進協会

<https://www.iyeo.org/>

カウンセラーが丁寧にアドバイス留学の不安を解消

青少年異文化交流推進協会 (IYEO Intercultural Youth Exchange Organization) は、多様化する社会の中において「自分でしっかり考えて、行動を起こせる」人を支援すべく、異文化交流、世界各地におけるさまざまな形態の教育、研修などを通し「気づき」の機会を提供することを目的とし平成13年3月に法人化し活動しています。

若者の可能性は無限大であり、その若者が世界で活躍することは、これからの社会にとってますます重要になってきます。「違いを楽しむことを知り、異文化の人たちと共同で物事を進められる若者の育成に役立てれば」と理事長を務める吉川浩司さん。

たくさんの希望と少しの不安を胸に来日する海外の高校生たちに、受け入れてくれる高校を探すところから、ホストファミリーとの橋渡しや生活面での困りごと、カウンセリングなど広島本部の他、札幌、仙台、千葉、福岡、そしてオーストラリア、ニュージーランドのスタッフとともに手厚いサポートで支えています。



▲ ホストシスターと

また、海外の学生団体や教員の日本文化研修の実施、スポーツを通じた交流なども行っており、令和元年7月には、広島県教育委員会、広島県私立中学高等学校協会の協賛・後援のもと、異文化交流ユースキャンプを開催。台湾、タイからの留学生を交え、国籍や文化を超えたチームワークを築き活動しました。参加した



▲ タイへの帰国時、空港にて。ホストファミリーや尾道高校の先生・生徒と。

子どもたちは、言葉が通じなくても伝えたい思いがあれば意思の疎通ができることを学び、成長していくそうです。



▲ 理事長の吉川浩司さん

日本からの留学生の支援も充実しており「返済不要の奨学金」でアメリカ大学留学を実現させるプログラムについても定期的に説明会を開催。このプログラムは日本の大学に進学するのと同じくらいの費用で留学でき、卒業率は95%を誇っています。またカウンセラーが1人1人に対し留学に関する適切なアドバイスを行っています。カウンセラーは自身の経験をもとに、日本語が通用しない留学の不便さ、生活面などをアドバイスするとともに、自分で開拓していく力を身に付けることができるよう、丁寧なカウンセリングを重ね、寄り添ってサポートしています。

新しい時代は学びの宝庫 オンラインを通して広がる世界

新しい生活様式が問われているなか、海外留学にも大きな変化が現れています。バーチャル留学やオンライン学習が注目を集めており、当協会でも多国籍なオンライン授業を開催予定です。日本・タイ・台湾などの参加者がすべて英語で行うプログラムは、お互い刺激しあうことで学習能力の向上が期待されます。

「今は留学生の受け入れが難しい状況ですが、いつか来日した時、少しでも自信に繋がるようにと、海外の学生を対象とした日本語クラスもオンラインで実施します。オンラインだからこそ身近に感じることもあるでしょうし、そのなかでできることはたくさんあると思います。広い世界がパソコン上で繋がるなんて素晴らしいこと」と話す吉川さん。

多様性と調和が世界で求められるなか、若者が可能性を広げ、広い世界で羽ばたけるよう、精力的に行っている皆さんの活動に、これからも大きな期待が寄せられます。



▲ アメリカの大学の友人とインドのお祭りを祝った時の様子

日本で働く外国人労働者の就労・生活面を支える

特定非営利活動法人国際人材支援センター

子どもたちの可能性をもっと広げてあげたい 希望に満ちた瞳に応える場所づくり

もともとは平成23年8月に、来日する外国人労働者に携帯電話を支援する目的で設立し、平成29年からは日本で働きたい外国人、日本で働いている外国人に対して就労や日常生活に関する支援、働きやすい環境づくりの実現を目指して活動し、今年10年目を迎えます。東京・大阪・福岡などの主要都市にも支部が増え、支援は全国に広がりました。現在は100人近い在日の外国人労働者を支援しており、これまでに支援した外国人は500人以上になります。

代表理事の土井慎二さんが外国人労働者の支援活動に着目したのは16年前。知人とインドネシアを訪問した時でした。設備の整っていない学校で学ぶ子どもたちや、裸足で生活する姿など、日本と大きく異なる生活環境にカルチャーショックを受けました。現地の子どもたちはそれが当たり前なのでキラキラとした笑顔で生活する姿に、土井さんは胸が熱くなったそうです。そして「なんとかして環境を充実させてあげたい」と強く感じたそうです。それから間もなく、人材派遣の仕事に携わっていた経験を活かし、活動をはじめました。

海外から来た若者に 日本を好きになってほしい

主な活動は、インターンシップ・留学生として来日した外国人と企業をマッチングするサポートで、企業へのアプローチが重要、と話す土井さん。「母国に帰ってからその技術を活かせるよう適材



▲ 水源確保の井戸掘りの様子 (カンボジア)



▲ 日本語を学ぶ若者たち (ベトナム)

適所への見極めは欠かせません。せっかく日本に来たのだから、高い技術をしっかり持って帰ってほしい。そして日本を好きになってほしい」と言います。日本の当たり前が通じない事も多く、「時間の流れが違います。だから最初は朝礼に間に合わない事も珍しくない。日本のルールやマナーは彼らが日本で暮らす上で重要なので、そこはしっかりと伝えるようにしています」と土井さん。とはいえ関係性はギブアンドテイク。外国人から気づかされることも多いそうで、常に広い視野を持ち、フラットな気持ちで対応することを心がけています。「ありがとう！なんて笑顔で言われると最高です。問題も尽きませんが続けていよかったですと救われる瞬間です」。

今後は海外での支援も強化させる方針で、東南アジアを中心に行っている学校設立や環境整備の他、現地雇用を増やす取り組みを検討中だそうです。一人でも多くの若者へその熱意が届けられることを願ってやみません。



▲ 村の子どもたち (カンボジア)